



春夏秋冬

12

欣
203
4

203
4



や

春隻秋夕之春篇卷之四

秋 203 4

伊勢茂

東都

振鷺亭主人 著

第七齣

松風僊人十覽臺み奇現す
路江御料鎌倉山は操を耀と

さても路にハ馬の上は細らま九人の強盜等以九圍とて荊蕀蔞蔞を
推分は路に死ねおと玉里りり是より又先ハ白雲横に言り言深じて

日影をえぞ峻志さ登り谷より或ハ怖りき崖とつひみ水
激く碧潭方糸川をとり休まは鬼きゆるむり乃心城に
志き下ふいりてぬ而老松森々とてを渡木の間を漏るる霧ひやかし
峰に骨冷身毛服て是よりふは處ハ救百文の宿石後身て多白翔たさ



光景をて此小大さる洞窟ありて蒼苔備なり又穴の四を小鉄の連鎖と
繋ぎたる鳴子あり絨笠を道成曳込にて待たる所より少刻ありて蒼雲乃
真より一個の老女束苜を懸て推し出まらぬ路に此老女をりるよ膝六十
ありし顔の白髪をよむらむをさる御所の局をきたる狂扮するが形ら
賊等に向く大美のほ中家へは絨笠ハ路にを引はして何おもむくは
彼老女ハ路に薄を糸に乃雲をさる其より接て体の岩窟の中へ入る
借洞の只狭して偃偃て入るがやなるは小穴の奥ハ闊して左右より
石壁ありて中の道一筋岩石成鑿するが一町どるも闊穴乃のどくあり
遠より歩み出らぬ清奇典麗なる地方なりて不思俊や樓門宮
殿たてつらありて宛を僊境の空室の心地さる川路に又一の老女ハ
ととてきて樓門を進入する小梅の架柱の棟香木を震れ金玉以

鏤る殿宇幾間ともなくして奥小穴の處は彼老女ハ路に小向てきたる
りて小待中にて高尚奥深くまぬ世附路にのみるは是をいふ形人の
後橋の深山幽谷小殿造をへむもんとく山嶺などの隔ふありて小
山嶺小魁さらけを和らむと評さるるまると尚心怖きまはありて
るまるとは小核閣小遠よりある様ありて乃間塔上まで糸の欄行る
り路にハ小廻廊を白壁ともなくとせり後頂小玉ありて見まは十覽見臺と
いふ金榜をとり世臺といふハ萱薙て空に峙てどく地あり湯は似る金の
階珠の初七寶巖如飾り花を竹木を畫して五彩彰々施せり又その
風景を眺るる九洞庭西湖松竹象汲を因るありて壺中より山川
又宿ち一粒の粟の中より日月を養へる神の術ありとぞとれく路にハ
いふく怪きまるとハ小主いふまはハ出る臺階水石遊湯の美を擅する



春遊記 卷之四 三十一

車ぞとおひのちよは妻小女の突多志と六路にまもて不審て何れを
やとひそかき暗して復の世方少りや成削て内を梶を願するよ路を
乃後十六七より其に五歳むろとの端女二千餘人をぞ有る二人の女何れ
捨に後てさ色くと秋伏は又傍る一人乃女このまなき色にさるうと
く被をば掩きて笑る又傍る二人の女涙を借せて去るハ我をかく
ざらむとあそむ處小至り然夕暮るを受るまなんぞ思ひさらんやと
只顧みあはるは又傍る一人其女中取て阿妻の苦もあは時して
心よきともありそとておひをむ路にありさるを足てこへは女むもこぞ
とく虜とあり色慾るべき中か又笑ふそ心女とと朝日初暮るをさる
以元の彼老女貞の方より出来りて世般ハ何某殿の御伽の番りりと喚
もまバ忽ち一人れ沙面の女答てえろハ准じ及ハ急は頼ひおまハ我を

代して来るよとそめて衣脱以脱て得にほじが輝とも舞て肥胞さる全社と
かりて何の恥る風情とあかむを咲て眞の方まはる路にハ色以て甚
呆まて思ひるハ彼女厚面皮して馴侮は最醜き體まこあるはじき藥効
その喜ぬむるよと見ると又眞乃方より一人の女出来りぬと又素祖そ
而の色青びと容瘦て今血まろく遍身は月行は流るが涙を合て去るハ
いふまに世おたら道さあくる流標志目ハ遭ふ事とと去る敢るハ後ハ咽
袂をどはる多世附路にハ何とやん恒中して心頭突々と踊る我身を
又いふまにさむらあたらと唯惘然して居るハ彼老女又出来りりるが
いよは後いよの女囁ちおとすと高聲小呼りるハ路にハ嚇得て物敷
あり彼老女ハ路にハを合て一間いさるひ坐は熟ちて去るハこと
發るも理りそのほ細を語り中せんともる敏の御主と申し世よ

あつた御方までいせ給ふは二の川で風塵の交を釣たまひと困寂
なる淨地好で土の山の頂小引籠はほどう後より宿るる御膳を
くるて真を修性を養ひよるあかくのどく救急の女船がせ
らして昼夜二六時中をまかひるぐの情の川用がさうあはれりなき
のまじ今もは御侍の女船のどく體身とあて御花田畑ひと御中
たののまて他の仔細はぬき改め日向の中より必怪しとこのかた
といまごもろごる小路のたひはぬき改めを厲してなるの吾儕はと義
を金織の物言ふまあひのふたもいさう身を操るゑのよとを
はびまのまの首の背で一命がけさるゑこれこそ我身のなるさう
従ひまひまはとさる言も静態振ひ個て涙を落さるり老女の路に
光景を見て暖を合てさういふとせに稀有の束のまは路も理

かまひつらつらと御方の事をもたげ御房を紙で膚が摩沙年この
を罪にして飯を房の事を打つと一人もあつた人々もはえてま
時の命をもとらふとのやう小敷き悲にも別て却て快くはくまの
眺をも早く揚てまゝ乃宝次びてその舞送る給るのさ姑くの勤仕
みて強ち真の乃を破るとさうもあつた曲て老が言ふまはひ後
さういふ言を隨てぞ進める此時路に難美心頭小遍つておの
はあかく會内とあつたまは死る命さういふ老女が言ふまはひ
事をおのまの安否をばさるもあつた縦横陣のさうも實事さう
さういふ真女の乃が破るはもあつたさういふ協をね時宜及る
死ぬるままでと思置ての老女に向てさういふ身と言ふ相違さう
のいよてあつたさういふを降ひまはすは儲取事おわてはさう



卷之四
五ノ部



卷之四
五ノ部

生肉を將酒より煮て之を粉一命を膳中よりやとて佐言を敷てぞ中らる
 老女大ひも喜びて去物きてとの東へ安堵あじとて尚又是れをなまき時由
 成一々いひ合はるに此時路に足膝を空ちひ身今うらふ記さうととひけり
 と精神を激し心膝を硬し九帳の信はあつて衣帯を解て言脚にあり
 羅の勝衣を被て單の袈衣の帯を帯るがあつても肌層を露し一五六
 何あり乃洗核さふ思をも教よとつと溢るる洞推搥くさ生執貫
 ふよる心地して靴も彼老女にもまきて帳を深くぞ進るまぞ主乃
 後雨と道さきふまらる路にさふ心狂し腹懐ひ小膝を折てたと伏さ
 と心の中ふとひるはは大摩王いさるも変まかく人を惱し饒劇いさるや
 とさじ高をあきて見ておとつ一個の道人一脚の方拵ふ任おさる齡の短い針も
 芙蓉の影をせ麗しく眼の靨変じて童顔のごく髪髪長くのびて髪毛もふ

ぬき身は金蟬の羽衣を穿その根異形不見後より又物勝るぞと見さる
 洲附の老女ハ路に身を執て倚の傍は衝遣て退きぬ路にその能心を蓋
 らひてたの自中て兩乳成匿し右の自を膝下成抑覆くは俯き跪れは彼
 乃人完尔して路江を見やじがわけて一粒の香を拵し相々と打頼て去推ま山待
 たまを行向えぬ人跡後る山中にける光景こそ不審小思ひはらわ我ハ是
 神氣を養ふ長生の乃士はて元も色小係念は只你がその職る漏精と
 末て密んがる小你を以處ふ招きなりと乃東故とのハ我懐を澄し道を觀
 九答の丹經とまびて三直の術は明け方成傳るがゆふをく穀食を弁元
 氣成吸て長生不死の藥ををともる其丹藥成煉る方といふハ九々ハ
 十一人乃婦女の精液をのりてまは成煉るを煉て丸とよとまは成眞惡丸
 と名づきてたは服茶と仙家小秘送する而る靴も婦女の精液と採り

新編和名抄 卷之四

新編和名抄 卷之四

九八十八人向ん今今日你を以て九々の救全畢すは姑よるこびぬ後なる
 たり你快く我喜ぶ以て藥方問ふおおては速くその而後の方に還帰をせ
 何麼この怖き車に乗らんと只顧路に向を睥睨しておんりある
 ぞ路にの冷きう月をいよもて怖くはた心定てなるは君か
 聊尔は冷ゆるるる吾儕のままある月かを一人の妻とせしより二せび
 志成あさむど女の貞節はと金鐵よりをかに君すはせもは志を破る
 んと志食さば早く吾儕が命断るを又この志を憐れなるは速く
 許さるんやと心を拊て悲きけり乃人乞を定て黙々してお領計を
 ぐり路に高相を觀し思慮して去るは熱々その相貌をわんがみる小
 你いかにまあり又たぐひなき貞心の女なり你車を漏さざるのよあさ
 ば我秘密のりを傳へるは我元來むじ杜に時ハ五通七席とら

偷盜の酋長は偶山中におて不思の寶書を拾ひ得るこは仙術の
 秘書はて更に入間の号なきのふあは我は一時慕悪の生活は
 して安期の術を好むも仙術を修行は神使ひ鬼を殺す或ハ空よ
 騰て飛行す神変自在の方術悉く修りけり尚長生の藥を調え
 があまき郷里の女をを奪取しけりも留まらず不義小醜と色を耽るとの
 きて休まざる貞正の女をえど我元來色欲心するそのはあさるんや
 乃乃婦の礼を乱らるんや路に乞を定てたひ小喜びて去るは
 の操をももせ終ふおおてハ恨令ひ身まみ相見せて死するとを
 意あり乃んか去いやまよ你がまのや死さるはてはまた死さるは
 生相道の附節は其附心小我を又你相違ふは你かあるも貞女
 乃志成経緯ゆして勢なき事なるは路に乞を定てとらふ心たのりく

思てそそ志らじむまの安んびを備細小後務らんやと向ふ人頭成り
アてやよ休天機成漏るる方と之畢ては成因路に再三向ふ小
人口をひらいてそそ起よと喝せよと指を按て海印咒文成唱す
忽然して一朶の彩雲將下り乃人成引蔽と具に山谷震動して疾雨
迅雷ありそそ成小園夜のどく一陣の狂風足下を起り路にを巻
吹と再々として空を向く飛行す

第八齒

伊三由比濱の檀翠印成賺す

三途河邊新居の欲魔堂は甚凡む

かくて路に八雲とよ捲あもる空中小流ひて或は高小舟で或は低小舟
凡一瞬たり花初とよにじが忽ち地上を鼓とと落るるよと覺ふに
人心地つきては方を尋る小洲処のよと乃地をを知らず年功脚を

と草堂嵐々との路をさる月の色も幽して東西二日かき且は文
夢小似て夢よあもる旅心神芳とそ奈何とすなきやうなるも
此時路に思索さる小今も小田京小とありかこ又金澤はと回
水小投してや死なん本小溢る死なん急や世は角やと十方ありてた
痴呆て此が又ありや我身今も死んで自殺してやも貞女の心あり
あまは彼道人の教は後世志とくま川死す命をなすまの安んび
尋んで路終るまの何せんよと心静て自ら小たりの方にあて
林ありその程より瑤穂の光架々とよとては成りるありと天ひ小
力成りて路を遠かとも暗さる北月よりさく生茂の草盧葦乃中を
推目もあまたよとよひてやうの林の裡小至りて一箇の



般般あり返工不詳小怪と朝陽傾き嵐をて言小灰を坊車乃
 音志生路にまづ極の懐くも内をに視き勅藤を願ふ小
 一今の焼地炉の傍に坐して夜業をば居る髪ハ凌麻を束さる也
 老女中て外中人影をえさる路にハ懸まいまるとして門の戸を敲き
 ちよバ彼老女誰ぞやと答て何よりを問て門口に靴出さるバ
 即路にハ腰を折れ伏して去るハ吾儕ハ旅のものをとて夜よ入て
 路我共ひひ取も遂ひ来りありを十方ふとて難儀とてハ抱き
 一夜を明さるやび持らんや彼焼をて我はて何とも言を出さる路に
 我怪吉ら打見せしが終ふにを問て何より身独まて固執いなきや
 路に答て去るハ此道のものもむと付けしを路中て不審妙事と見矣
 中ぬ彼焼をて我はて終願て去るハ難儀のりあるをまづは方へ入

だそのやとて並小家の内ふ入ちち志行様の上ふ草葉越成布路にを坐
 不進きて茶成考態敷小待ひり此付路にハ心身を休て入る宵の香き
 一乳をを賜ちよバ彼焼がいふ妻客かると心易とて去るを以身かまが
 何國より何方へ来たのや路に云吾儕ハ武列金澤のものよとて言
 今日まよ共小田原乃親戚の方へ参る乃すがらるが朝黄奈の切
 通と申んきて教言の絨小初さよ逐小まの初湯を共ひひる生死の後
 いくさうのつて此東の案に頼ひぬと云も敢て潜然と涙を流し
 ちれを彼焼をををけて昔の涙を償して去るハさて世小ハ儼き
 車をもろもよまるとのうらなこまをばぬくおとよとつて人の心も
 障のりぞあるり當村小和合法院と申す修験者来つるが車乃
 吉区を登載ふよとて卜小奇妙不思後の水ありて人々活神のてく

春集新巻 巻之四

神六部

高^{あが}中^{ちゆう}より内^{うち}の修^{しゆ}験^{げん}者^{しや}不^ふま^まる^る人^{ひと}乃^ゆ左^さ所^{しよ}且^{かつ}其^{その}身^みの吉^{きち}凶^{きゆう}をそ^そう^うか^かひ^ひこ^こま^ま
 り射^あ覆^{くわ}ら^らざ^ざといふ^いる^るき^きなる^る彼^か修^{しゆ}験^{げん}者^{しや}我^{われ}家^けに^に毎^{まい}夜^や修^{しゆ}行^{ぎやう}す^すま^ま
 る^るが^がそ^そや^やその^{その}左^さ例^{れい}の^のか^かい^いま^まご^ごを^をう^うさ^さる^る所^{しよ}不^ふ香^{かう}不^ふ思^しの^の方^{かた}不^ふ揚^{やう}杖^{じやう}の^の音^ね
 け^けい^いの^の境^{きやう}を^を以^もて^てこ^こを^を彼^か修^{しゆ}験^{げん}者^{しや}来^きり^りぬ^ぬと^と待^{まち}所^{しよ}不^ふ字^じ不^ふ文^{ぶん}
 我^{われ}唱^{なう}揚^{やう}杖^{じやう}を^を打^う鳴^{なう}走^{そう}て^て就^すふ^ふ門^{もん}に^に不^ふ進^{しん}ま^まり^りて^て即^{すなは}ち^ち肉^{にく}の^の境^{きやう}を^をま^ま
 ぎ^ぎて^て法^{ほう}院^{いん}入^いた^たま^まと^と呼^よび^ひま^まり^りて^て彼^か修^{しゆ}験^{げん}者^{しや}の^の外^{そと}面^{めん}より^{より}焼^や何^{なに}事^じの^の用^{よう}被^ひあ^あ
 として^{して}從^{やが}て^て内^{うち}に^に入^い来^きり^りぬ^ぬ路^じに^に卅^{じやう}修^{しゆ}験^{げん}者^{しや}を^を見^みり^りて^て發^{はつ}の^の聲^{せい}僧^{そう}は^はて^て不^ふ動^{どう}無^む言^{げん}
 を^を單^か大^{だい}ひ^ひる^る本^{ほん}持^ぢ子^しの^の會^{かい}殊^{じゆ}を^をう^うさ^さる^る境^{きやう}ハ^ハの^の修^{しゆ}験^{げん}者^{しや}不^ふ向^{かう}て^てま^ま
 へ^へま^まり^りる^る女^{にょ}觸^{じゆく}ハ^ハ今^{いま}宵^よ我^{われ}家^けに^に宿^{しゆく}し^して^て路^じ中^{ちゆう}に^にて^て成^ね乃^の
 難^{なん}不^ふ遭^あま^まる^る人^{ひと}を^を見^みる^るに^によ^より^りて^て今^{いま}法^{ほう}院^{いん}に^に於^あり^りて^て妻^{あんな}不^ふ言^{げん}を^を
 藏^{ざう}ふ^ふり^りて^て中^{ちゆう}に^にあ^あり^りる^る修^{しゆ}験^{げん}者^{しや}を^を以^もて^て心^{こころ}中^{ちゆう}に^にあ^あり^りて^て即^{すなは}ち^ち袖^{そで}の^の裡^{うち}に^に

課^み筒^{つと}を^を把^は出^し西^{せい}の^の方^{かた}に^にて^てを^を捧^たま^ま三^{さん}般^{ぱん}載^{ざい}て^ては^は直^{ちやく}言^{げん}以^も羅^ら尼^にを^を陰^{いん}に^には^は
 課^み筒^{つと}を^を振^ふて^て一^{いつ}本^{ほん}の^の藏^{ざう}を^を出^し世^せに^に路^じに^に向^{かう}て^てま^まり^りて^て第^{だい}七^{しち}五^ご番^{ばん}大^{だい}凶^{きゆう}乃^の台^{だい}
 かり^{かり}ら^ら文^{ぶん}を^を案^{あん}じ^じる^る不^ふす^すぐ^ぐ利^りら^らる^る女^{にょ}觸^{じゆく}か^かり^りて^て懐^{くわい}ふ^ふか^かま^まハ
 不^ふ道^{だう}の^の災^{さい}難^{なん}且^{かつ}不^ふお^おる^る途^とと^とも^も災^{さい}星^{せい}小^{せう}あ^あま^まに^に懐^{くわい}甚^{じん}し^しよ^よら^らく
 信^{しん}心^{しん}に^にあ^あり^りて^て遂^{つい}に^に肺^{はい}を^を告^こて^て外^{そと}面^{めん}に^に出^した^たる^る彼^か境^{きやう}又^{また}何^{なに}ゆ^ゆえ^えに^に忙^{いそ}々^{ささ}の^の修
 験^{げん}者^{しや}を^を遠^{とほ}て^て外^{そと}面^{めん}の^の方^{かた}に^にま^まり^りて^て卅^{じやう}時^じ野^や寺^じの^の撞^つ殿^{でん}々^さと^とて^てあ^あり^りて^てあ^あり^りて^て
 ら^らく^く松^{しょう}の^の音^ね被^ひあ^ある^る声^{せい}の^のま^まじ^じに^にて^て猶^{なほ}夜^やを^を更^ふけ^けく^く光^あ景^{けい}を^をう^うら^らむ^む路^じに^に
 何^{なに}さ^さる^る物^{もの}携^たり^りて^て池^{いけ}隅^ぐを^を見^みま^まり^りて^て不^ふ思^しの^の方^{かた}に^に不^ふ香^{かう}不^ふ思^しの^の境^{きやう}を^をま^ま
 直^{ちやく}に^に其^{その}所^{しよ}誓^{ちか}を^をま^まり^りて^て生^{なま}む^むら^らの^の心^{こころ}を^をう^うら^らむ^む合^あふ^ふま^まり^りて^てあ^あり^りて^て
 又^{また}の^の藏^{ざう}の^の凶^{きゆう}兆^{てう}を^をあ^あり^りて^て不^ふ思^しの^の方^{かた}に^に不^ふ香^{かう}不^ふ思^しの^の境^{きやう}を^をま^ま
 る^る不^ふ思^しの^の方^{かた}に^に不^ふ香^{かう}不^ふ思^しの^の境^{きやう}を^をま^まり^りて^て路^じに^にま^まり^りて^て即^{すなは}ち^ち袖^{そで}の^の裡^{うち}に^に

三十一
 卷之四

三十一

目^めに侍^{さむらい}て外^{とち}向^{むか}の物^{もの}静^{しず}を扇^{あふ}ふ彼^{かの}境^{さかい}が交^まりてまを^ま你^{なんぢ}かこして早く^{はや}我^{われ}の
眼^め語^{ことば}をさまりよく計^{はかり}較^{くら}を情^{なさ}して藏^{くら}の向^{むか}を洗^{すす}ちはて彼^{かの}奴^{やつ}を心^{こころ}成^{なり}す
まづ彼^{かの}女^をを嚇^{おそ}すてまは彼^{かの}女^を神^{かみ}妙^{たへ}ふ我^{われ}言^{ことば}は後^{あと}を明^{あきら}白^{しろ}ふ女^を藏^{くら}の擬^な下^げ
方^{かた}は術^{じゆつ}を大^{おほ}會^{あひ}するはり又^{また}彼^{かの}奴^{やつ}を強^{こゝろ}くして後^{あと}はさ附^つへまは西^{さい}肺^{はい}の花^{はな}物^{もの}
まはを刺^ささるやまは彼^{かの}奴^{やつ}がは小^こ現^{げん}其^{その}角^{かく}を啣^{くは}せ物^{もの}小^こ相^{あひ}つまおこはは急^{いそ}
竹^{たけ}樂^{がく}が雇^やて来^きるの女^をを捨^すて由^{よし}比^ひ院^{いん}の物^{もの}子^こを談^{だん}講^{かう}し曲^{まが}金^{かね}卑^ひくま
を今^{いま}術^{じゆつ}にして銀^{ぎん}を扇^{あふ}すは今夜^{こんや}又^{また}先^{せん}明^{めい}寺^{てら}ふ通^と夜^やの籠^{かご}あり我^{われ}又^{また}彼^{かの}奴^{やつ}
を甲^かして糸^{いと}傍^{はた}の鐘^{かね}老^{らう}が担^{たん}を前^{まへ}きまへん竹^{たけ}吃^くと造^{ぞう}業^{ぎやう}務^むを結^{むす}べと身^み彼^{かの}
なる小^こ彼^{かの}修^{しゆ}驗^{げん}者^{しや}らち懸^かひ心^{こころ}及^{およ}びまて振^ふて世^よ物^{もの}田^{でん}の畔^{はた}をはては飛^とぶや
小^こま甲^かに合^あはる州^{しゅう}附^ふ路^ろに内^{うち}小^こありて三^{さん}口^{くち}の花^{はな}後^{あと}ハ腹^{はら}とぼくありまはる由^{よし}は度^ど
の揚^{ひら}子^こは術^{じゆつ}やんといひ氏^し言^{ことば}累^{かさね}さく身^みま入^いく大^{おほ}ひよあきまはる為^{ため}は杜^と右^{みぎ}

とまらふ小^こ忽^{たち}ち彼^{かの}境^{さかい}外^{とち}向^{むか}ま入^い来^きりて戸^とを強^{こゝろ}紐^{ひも}を搭^かへ路^ち江^がの股^{また}
慄^{おそ}慌^{あわ}忙^{まじ}たるまらるる境^{さかい}ハ先^{せん}景^{けい}を看^みて嘆^{なげ}を合^あてまらるる身^み安^{やす}んハ受^うりて
身^みまのたをま助^{すけ}たまふ身^み困^{こま}るまらるる身^み安^{やす}んハ受^うりて
調^{てう}ふはさしまはるる膏^{こう}宿^{しゆく}の料^{りやう}をまはは路^ち江^がの正^{ただ}をばはるる心^{こころ}の申^{まを}
小^こ思^{おも}ひるは身^み元^{もと}より行^ゆかたははして分^{ぶん}説^{せつ}なまはるる身^み安^{やす}んハ受^うりて
てまはるる身^み元^{もと}より行^ゆかたははして分^{ぶん}説^{せつ}なまはるる身^み安^{やす}んハ受^うりて
その人^{ひと}研^{けん}まはるる身^み元^{もと}より行^ゆかたははして分^{ぶん}説^{せつ}なまはるる身^み安^{やす}んハ受^うりて
たははるる身^み元^{もと}より行^ゆかたははして分^{ぶん}説^{せつ}なまはるる身^み安^{やす}んハ受^うりて
身^み元^{もと}より行^ゆかたははして分^{ぶん}説^{せつ}なまはるる身^み安^{やす}んハ受^うりて
今^{いま}の儀^ぎ乃^{すなは}て内^{うち}向^{むか}の命^{いのち}惻^{あは}れまはるる身^み元^{もと}より行^ゆかたははして分^{ぶん}説^{せつ}なまはるる身^み安^{やす}んハ受^うりて
て門^{かど}口^{ぐち}ふまはるる身^み元^{もと}より行^ゆかたははして分^{ぶん}説^{せつ}なまはるる身^み安^{やす}んハ受^うりて

春の巻 火入

春の巻 火入

春の巻 火入

うの女前おんなまへの中なか若わかうが中なか世よが実まことは縁ゆかりの台たい文ぶんを考かんがゆは
 彼人かれひと乃なほまとの六むつは是こゝろより東とう南なんの山やま中なかおおて血ちを吐はきて大おほま落おちし命いのちを
 墮おとつる完まる肉にくへ狐きつね狼おおかみのこち小ちひ喰くはくこは世よ間まいとこち小ちひ願ねがひてすて
 口くち乃なほ體たいとほと後ごでぬあなる無む心しんの東とううるを路ぢにのをを空そらと散ちり
 胸むね塞ふさ目めも閉とめてこは我わがまをむむさくかの路ぢふよとてをを放はなて後ご悲かなむ
 境さかい又また路ぢに北きた月つきを極たぎてさるはこを致いたさしつゝは路ぢに
 彼かれ驗けん者しや中なか世よは心こゝろの藏くらひの外ほかよは路ぢに災さい難なん立た地ぢよ發はるべし
 為な来きたも大おほ凶きようありり取とり大おほ凶きようの占うらひも亦また變かりて大おほ吉きちとる事ことありなりと
 うの女おんな前まへの身みれは洋やう中なか小ちひ指さしを刺さるるこはさるるは
 へ波なみは心こゝろをぬるごとく末すえ吉きちありと後ごでゆふよよりて思おもひ後ごは心こゝろ
 不ふ交あはせていま世よ難なん風ふうも遭あひてはは知しる島しまもかく特とく小ちひ禍わざはひ且かつの向むかひ

逼せまりかごとくは縁ゆかりの談だん講かうをあるは大おほ儀ぎの撒さら丁てい今いま宵よ光ひかり明あきら寺てらの
 心こゝろにこは心こゝろの術う花はな巷ぢ小ちひ到いたり家いえ安やす茶ちや花はなの人ひとは心こゝろを托たくて
 前まへ程ほど多おほく心こゝろを計はかりてはは指さしを刺さるる高たか火ひの
 心こゝろ必かならずと心こゝろを願ねがひ心こゝろを遂とるるは路ぢにこは心こゝろを
 思おもひ食く何なにを以もつて報むかひ中なかこは後ごも亦また吾わが儼げん若わかて他ほかのまを持もてゆくと
 世よの業わざん事こと思おもひ心こゝろも後ごもさるるは我わがま世よを遊あそぶは心こゝろ自みづから
 害がいりて死しまるとる覺かく悟ごのこは心こゝろに只ただ世よあをを憐あはれ持もて今いま宵よ一ひと夜よ乃なり
 宿やどを准したたまはる後ご臥ふして九く泉せんの下した小ちひおおても亦またよく心こゝろを忘わすれ中なかま
 彼かれ境さかいは心こゝろ承うけ允ゆるなきは心こゝろを變かりてさるるは心こゝろ甚こゝろき不ふ良ら心こゝろなり
 今いまの世よ女おんなも心こゝろ小ちひ寡くわ婦ふ心こゝろ守まもりむさく花はな期きをこは心こゝろ一生いっしやう心こゝろを
 心こゝろの惟ただ心こゝろ心こゝろ今いま心こゝろ不ふ祥しやうもよとて假かり如ごと花はな心こゝろ心こゝろを洗せんるる



春之部

卷之四

四



春之部

卷之四

五

川身乃まほしやとて一亡人なほ強小端の乃以宵くといふを疑ふは
大敵より小田原の程を過るは好役をありて天道かあらむ情を
たまひて久くばて安否をも尋ねんと其時死生存亡もよおそ
ほ必ぞ事を成さばて老が言は任せゆく花街も赴く路にこそを
けり言を覆て答るや此一変ハ假如千般万回勸まふをて決て致
ほじきぞとて涙をとらて居り彼曉を直致せて忽ち糸をいらして
て襖紙を穿し路にが糸はは流れて去るいざ你をく一氏の證書
状書に元来我養女は相違なき文言はて年月の下よ小指を
く血花押状に物言をきていさば我を証據して明白の養女
とておの志くハ計るは偶やとて路にが膝下は血の路に
愈首を揺聲を放て大ひは哭きくわの姥忽ち荊の白髪逆し糸

揚目と嘖しとこと肝が大小比まていふ物を致致て矢ハカもつは
漢村の一箇家を我を新居の闇魔堂小かまらなき途河波女
といまらざや今ハ隙もせま亦活しも等敷をせざるありといさる洗
衣寄て路にが髪を梳んで引削てそのま取て押し路にのみ身を屈て
秋さるの志くまの我中と成はる今宵價をばて一夜の思と
蒙る車九鼎より重くて九鼎をも揃深さるねらう口今も
ぬらとびく此首飾を以て宿の傍とほははるんや彼曉ハ糸をきて
空嘯き天のひく陣は路にが面小唾を吐成カセが
振て去らるや寓料はさおき你がその生肌までも我々獲物なり
いふく狼腹心ぬるまひ成かなんとするや彼曉おらぬづきて去て
いふく

春集新巻 巻之四 春音 二四

我が心下の機関成程より望に耳ありて我が大なる成園よりわろしく
仕持木とありとて忽ち傍の二葉と扯扱しやぐり路にを真仰小踏た
世腹の上小お踏く伴の葉と地此角よりはてや小口には押入んとす
路のこの成ぬまもどれて下より撒廻して紀より急小走出入とす處小
焼はさかざと右のまを二重と引登たのまを地炉の鈎索とあまろ
取て金縛んと世が索ふるときまで誦鎮鎮くわの口へ忽ち火をお
消煙敷固て黒闇とわたり焼は成灰煙煤小咽びて目口鼻と酸哭
かぬことなると突を揚り回る路にへ又踏して外面の方小おび出入と
けが此時室の窠も焼も確と持あつて後といそ伏しぬ焼も又嘯く
肝と叫て撲地と外よりこの機舎に小持あつて地此角を放く
地炉の中小入してとらと火乃光成なる小を焼は成明をぬて只一

小腸成踏方路に踏らして倒る処を焼産もたてど約索を取より
早く路にを後なる木欄へはが又巾着はては小呻せれて地炉の傍の柱
を栓つまで焼は勝を磨り腰成極て徐々小紀よりてまろいあまを世奴
小のまを大小老が心を探らさるる酒成湯皿やとて即ち積おく所の松
系成まで地炉の中小お入煨糖成搜りて林火懸るる忽ち猛火煽々と
燃あが此時路にへ只顧重らして煙小哽咽を流のこ不塞敢是成
跪て悩む苦むむろりなり焼は此形勢成てを口小其無てお斂咲まこ
あくと吟笑てまろあらわりのち心地もや強口強くしてある幸き同の曹
事こそおのまが罪おのまを主負るとふとのまを必しも他を死せるま又ま
あが我を今宵へささり亡まの遠夜も小思を罪を流さつるよ南を世
阿弥陀佛とさるる口の下よりも只顧喃々と思てまろ路にへ又息も張る

かのりる間よを同成むらきて焼く光景を日にもる小彼焼も又目と目を日金
 せ頭々とお吸て去年朽て六流をくくしに煙もも咽とや信の三年日の中
 且ハ燗とも堪くこのまを掻くひるますいよに鹿麩ふこそありとて
 飲て佛檀乃肉より煤を強束のふ像と二面の位牌を把出世がとのほく
 地炉の火乃中ふお入に忽ち炎燄は林々湯祝ふ沸紀アさう焼たは成
 えて又いさるいさる酒の肴をを料理はとを傍の捺刃があつ執て紀と
 路の心の中は思ひ多うい我が一命今世廻るあおて殺されん去て運乃拙き
 所方のさう形がたと天焦熱の炎入る世間の鏝の煮らるるとも我が一心乃
 操ハ折くはきそのをを暫耐視ひ肴の処小焼又坐貝の籠れ中より蛇五
 六隻を抽出せが鼎ち鏝の中にとお入るふ小一隻の大蛇焼るを清で
 そこらありたの巡りるを焼はやく引提(常)ふまきつまで去るハ

你因果の理アを去るすて煙の臭籠れ鳥我る小入る耐公でら小脱ととい
 るは你も又我腹の中へ老の體を肥ふ成公殺ひるはとと畢て件の大
 蛇を獲れ中よお入る蛇ハ若くて首はあまの跳揚を湯ハ滾きては監玉
 を敷す州耐焼ハ路に面を斜小肴のて去る今你が両脚が公熱湯の中
 小塵入るは蛇のこ燗しは馬の活動をささむまぐ一杯の真酒を酌んやとて
 即ち酒壇を修飾件の禱は蛇を肴とて只顧飲喰ひ舌を鼓て紙で
 乃が醉十分小巡りて面色忽ち夜又のさう大ひみ吼り医傍小眼がふらて
 麦粟の穂をおさる連細が執り路にま向小は傍とて呼ては你
 今責難よる束を突ふ於ふや又身を術て兼花をさるのを殺むいろふ
 とて伴の連細が路にま向小閃し先は骨も痺け

春之部 卷之四



春之部 卷之四 十七

彼焼大ひ小を放て叫るハおのこは路廻らわ何日(我様)の下
 園套(か)かまて我を穿(ち)け押(お)せしめあな若(わか)くつたや畜(ちく)生(ま)はて捕(と)るハ
 操(と)るハ旅(たび)の女(め)福(ふ)たとも後(あと)と吳(ご)川(がわ)矢(や)つまる儘(まま)に丹(に)々(々)不(ふ)全(ぜん)身(しん)まゝ様(よう)の下(した)
 引(ひ)きまきて首(くび)を絞(しぼ)る上(うへ)出(で)川(がわ)只(ただ)眼(まなこ)を白(しろ)くは(は)きくびて口(くち)呻(うめ)むる
 かり路(みち)のへを怪(あや)しと看(み)る處(ところ)不(ふ)忽(と)ち様(よう)の下(した)も一(ひと)つの漢(ま)子(こ)あらこれ出(で)ぬ
 身(み)穴(あな)單(たん)の漢(ま)衣(え)を穿(ち)膈(かく)裏(うら)裏(うら)とひ(ひ)ろが急(いそ)ぎ路(みち)に口(くち)不(ふ)呻(うめ)むる巾(きん)
 成(な)りて焼(や)は小(こ)押(お)せり又(また)路(みち)に掛(か)け縛(しぼ)を糸(いと)で復(また)焼(や)成(な)り引(ひ)き出(で)件(けん)乃(すなは)ち索(うす)
 よてある小(こ)色(いろ)不(ふ)縛(しぼ)り傷(きず)の枝(えだ)よま(ま)てか(か)よ相(あ)つま(ま)に(に)吊(た)ち又(また)路(みち)に成(な)
 技(わざ)配(は)て旁(わら)ま(ま)そ(そ)る(る)女(め)福(ふ)す(す)じもあ(あ)ら(ら)み(み)た(た)り(り)な(な)我(わ)ら(ら)由(よし)比(ひ)浸(ひ)少(す)く
 佛(ほとけ)我(わ)ら(ら)と(と)今(いま)捕(と)師(し)の(の)ま(ま)今(いま)膏(こう)漢(ま)舟(ふね)よ(よ)外(ほか)お(お)ろ(ろ)所(ところ)小(こ)破(や)も(も)よ(よ)れ(れ)お(お)て修(しゆ)
 驗(けん)者(しや)と海(うみ)賊(ぞく)と語(かた)りある(ある)成(な)り(り)は(は)家(うち)の(の)焼(や)と謀(ま)合(あ)せて旅(たび)の(の)女(め)を誘(さ)

術(う)や(や)れ(れ)の(の)工(こう)中(ちゆう)價(あ)の(の)下(した)を論(ろん)わ(わ)り秋(あき)元(げん)光(こう)明(めい)寺(じ)よ(よ)帰(かへ)深(ふか)く佛(ほとけ)と謀(ま)合(あ)せて
 一(ひと)の争(まが)り(り)乃(すなは)ち危(あや)難(なん)成(な)り(り)今(いま)ま(ま)と(と)密(ひそ)か(か)此(こ)夜(よ)の(の)極(ごく)乃(すなは)ち下(した)に(に)急(いそ)び(び)入(い)り寝(ね)お(お)ろ(ろ)る(る)彼(か)
 為(な)ら(ら)び(び)辺(へん)の(の)檀(だん)拏(な)印(いん)よ(よ)ま(ま)は(は)又(また)い(い)ろ(ろ)の(の)計(けい)成(な)り(り)さ(さ)ん(ん)も(も)あ(あ)ら(ら)び(び)を(を)ち(ち)此(こ)夜(よ)成(な)り(り)落(お)ち(ち)ぬ
 とい(い)ま(ま)ま(ま)ま(ま)も(も)う(う)さ(さ)る(る)所(ところ)不(ふ)遠(とん)人(ひと)成(な)り(り)て脚(あし)歩(ふ)响(ひび)き(き)ば(ば)秋(あき)三(さん)つ(つ)て(て)を(を)彼(か)奴(やつ)ら(ら)ま(ま)ま
 ぬ(ぬ)と(と)急(いそ)ぎ(ぎ)打(うち)火(か)を(を)吹(ふ)消(しょう)路(みち)に(に)急(いそ)ぎ(ぎ)接(つ)て(て)外(ほか)面(めん)不(ふ)出(で)が(が)靴(くつ)不(ふ)彼(か)者(しや)も(も)近(ちか)く進(すす)ま(ま)来(こ)ぬ
 一(ひと)も(も)ま(ま)ら(ら)何(なに)處(ところ)か(か)見(み)え(え)ん(ん)と(と)只(ただ)一(ひと)つ(つ)の(の)轆轤(ろくろ)成(な)り(り)も(も)あ(あ)る(る)車(くるま)井(い)あり(り)と(と)急(いそ)ぎ(ぎ)見(み)ぬ
 陽(ひ)所(ところ)の(の)ま(ま)と(と)急(いそ)ぎ(ぎ)路(みち)に(に)を(を)縋(す)汲(く)索(さく)よ(よ)ま(ま)と(と)懸(か)柱(ちゆう)を(を)以(も)つ(つ)て(て)井(い)の(の)底(そこ)不(ふ)釣(つ)る(る)是(こ)れ
 又(また)傍(わら)み(み)の(の)一(ひと)福(ふ)成(な)り(り)も(も)あ(あ)る(る)救(きう)急(いそ)ぎ(ぎ)あり(り)此(こ)不(ふ)影(かげ)と(と)匿(かく)つ(つ)て(て)唾(つば)成(な)り(り)吞(の)んで(んで)急(いそ)ぎ(ぎ)居(ゐ)る(る)路(みち)
 彼(か)和(わ)合(が)け(け)院(いん)三(さん)つ(つ)個(こ)の(の)惣(そう)後(ご)急(いそ)ぎ(ぎ)成(な)り(り)た(た)ら(ら)ひ(ひ)て(て)一(ひと)乗(のり)の(の)竹(たけ)輿(こ)成(な)り(り)撞(つ)せ(せ)ま(ま)る(る)門(かど)よ(よ)ま(ま)に(に)
 ま(ま)づ(づ)刺(さ)す(す)と(と)怪(あや)しく(く)敲(たた)く(く)小(こ)肉(にく)より(り)急(いそ)ぎ(ぎ)も(も)る(る)は(は)彼(か)修(しゆ)驗(けん)者(しや)ら(ら)ま(ま)ま(ま)に(に)焼(や)さ(さ)ま(ま)ま(ま)に(に)
 む(む)の(の)り(り)集(あ)り(り)後(ご)急(いそ)ぎ(ぎ)對(たい)面(めん)薄(うす)り(り)お(お)じ(じ)と(と)い(い)ま(ま)に(に)又(また)光(こう)明(めい)寺(じ)よ(よ)ま(ま)ま(ま)に(に)居(ゐ)る(る)集(あ)り(り)

あんと区が果して控まらば推し捨つるに如くと言合む後後等即ち
 ざうくと肉を推し捨つるに如くと言合む後後等即ち
 彼塊が郷土の心を路にうつると心けてやふ日もしも投てそのま竹樂乃肉
 押令々外面は早出二條は上旨々と儘いふて急ぎ竹樂を投せて去らば附
 路に井の底ふありておをいふと声をする小彼修験者ハ約莫に五十歩計
 ほどあつたを身をゆはも頭を回して怪がそのま立戻してやぞ幹は行是成
 踏むも使成奴とて井の底をほ覗き窺ふ處と彼後三背後も覗ひきて
 力なき口で突墮せしむるち修験者ハ躬重して井の底は物中と路にハ
 えより躬重してまらくと井のよふ物尋るるを彼後三難く地よは技出と
 只是天惡を畏善を祐て控らむる所あり秋二忙と路にや向て云はぬ
 一重は行附路にありとも夜落るるははゆるふと州附路にハ乳を暢る間と

あはれ精の例にて急ぎ其の心を落しりりして路にハ急ぎ其の履所と
 前後も急ぎて奔るる程小舟は路にハ急ぎ其の履所と湖にて進
 びて後より急ぎ来やとんと怖るる彼方此と看去は遠對面の灣港乃
 例ふ一艘の舟舟無を林にて泊りて路にハ連は声をあせてその舟こさ
 へしなまると喚ぶるるは舟舟の内を風は吹哨の声して二つの舟士擡成揺る
 漕舟を脱す州方の宿に道へ路にハ何をいふ間もな舟の舟にやうはゆる
 彼舟士も又同のものにて舟を擡成揺る終に幸里まを漕ゆくよは急ぎ其の
 生茂りの中舟舟揺るが舟士擡を擡成揺るやういふ小舟舟にハ急ぎ
 かる夜ふるまはは急ぎ其の履所と湖にて進
 成のぶらまはは急ぎ其の履所と湖にて進
 標るるは急ぎ其の履所と湖にて進

門身もたれ我は舟も家も今も今も脚も解の正我は色揚子まのささし修論
者も世女こそ係ならぬ我價の貴状早て代貨物成着る後高松さび
と渠成して居て待ねるあまの上品の代貨物不圖ひとり我舟に踊込
かまもの天の雲を造化の旨と舌を紙と大い小町を我は
かまは成さく只呆ててさるる心の中おのち我は一身虎乃
口を脱して又この鰐乃口小陥るぬ世うへ左思右想千外方外徳
これ一死今へせむるを船を空て流小舟端より身を跳し海に
飛入らん世処我彼舟士女と抱き住て忽ち口小雲を衝きよ録子
成後足小録子成掛く舟底ふととと陽例しぬは附路にたや
いかんともとどけやうどなうりき

春菱秋冬春篇卷之四畢

本爰

